

第7章 結論

第1節 終わりに

以上、昭和文学による朝鮮体験を六人の作家を通して、日本と朝鮮内部という二つの視点を設定し、それぞれを違う角度で捉えてきた。しかし、昭和文学の朝鮮体験といっても、そこには朝鮮の作家と日本の作家において微妙な違いが存在しているように思われる。というのは、日本の作家においての朝鮮体験は異郷としての植民地体験になるが、朝鮮の作家にとっては、朝鮮は体験する以前からすでに存在しているものであるからである。つまり、それは体験というより、ある種の紹介に近い形をとっているといえる。もちろん、紹介に近い形といっても、日本の文壇で活躍し、日本語で創作を続けたこれらの朝鮮人作家による言説は、一種の変質的な形ではあるが、それもまた昭和文学による朝鮮体験であったことはいままでもない。それらの事情は、本論の展開の中で自ずから確認できると思われる。以下、本論で考察したそれぞれの朝鮮体験を簡単にまとめる。

まず、中島敦の朝鮮体験については、その朝鮮人像に注目し、植民地を生きる朝鮮人像を明らかにした。中島敦の初期作である「逡巡の居る風景」「プウルの傍で」「虎狩」では、いずれも現実には安定できず、時代を浮遊するさまざまな朝鮮人が登場している。そして、それらの人物は男性と女性によって一つの類型をなしているのが確認できる。男性の場合はほとんど反日的な性格で共通し、女性の場合はいずれも娼婦という造形である。このような類型的な人物造形は、中島敦の朝鮮体験がもたらした的確な現実認識によるものである。一方、「虎狩」では、朝鮮の虎が重要なモチーフとして使われているが、その虎が主人公の朝鮮人少年のイメジと重なり、彼の没落を予告しているものになっている。このような「虎狩」での人物造形と虎という素材は、後の「山月記」などの作品にさらに拡散している。

金史良文学においては、まず、朝鮮の内鮮一体期を反映する朝鮮人の名前の問題をおもに考察した。「光の中に」では、南（みなみ）と南（なん）の間に揺れ動く主人公の心理の変遷過程が描かれており、「天馬」では親日評論家の創氏名が注目されている。また、「光冥」では、内鮮結婚し、朝鮮人の出自を隠す清水という日本名が問題になっており、日本での最後の小説である「親方コブセ」では、奇妙な名前を名乗る朝鮮人労働者が多く見られる。このことから、金史良はこれらの作品を通して、当時、実施したばかりの創氏改名の持つ矛盾を明らかにし、この制度への強い批判を投げかけていたことが確認できる。一方、金史良は日本による植民地政策だけを批判したのではなく、朝鮮側のさまざまな問題も取

り上げている。白々教事件を題材にした「草深し」では、色衣を強要する統治者への批判だけではなく、無知蒙昧な民衆をたぶらかし、財産と命を奪う陰惨な宗教がはびこる朝鮮自体の現実にも強い批判が投げかけられているのである。そして、このような白々教事件はの影は、「大白山脈」「海への歌」で新たに変容している。

湯浅克衛においては、彼が幼年期以来を成長し、故郷として愛してやまなかった水原という異郷の街の性格を考察した。そして、そこでは、水原という街が、日本を食いつめ、新しくこの地に移住してきた日本人を最終的に安定させるといふ、あたかも母胎のような役割をしていたことが確認できる。散々な辛苦のすえ、水原で安定する話の展開は、湯浅克衛文学の出発である「カンナニ」と「焔の記録」から始まるが、それが「城門の街」では、水原という街完全が日本人を守る大きな母胎として拡大されていく。しかし、この地に移り住んだ日本人にとって、望郷で見えるように、水原も一つの異郷に過ぎず、それで当然望郷の念に苛まれることになるが、それが「葉山桃子」で活躍する水原生まれの二世たちによって、初めて真の故郷として転じていくことになる。湯浅克衛の「朝鮮の水原」という故郷認識は、まさにこのような歴史的・心理的な過程の中で形成されたものである。しかし、こうした植民の過程とは裏腹に、湯浅克衛は、朝鮮総督府の心田開発を久しぶりの帰郷の際に体験し、それらの模様を「心田開発」二作に描いているが、ここでは、さまざまな批判的な言説が窺えており、湯浅克衛の朝鮮認識の複雑さをも物語っている。

田中英光においては、彼が戦時期の朝鮮文壇と密接に関わった一部始終を、牧洋という一人の朝鮮人作家との文学的なやりとりを通して明らかにした。田中英光の「碧空見えぬ」は、牧洋という朝鮮人小説家が日本精神の象徴としての「碧空」を見るまでの話で、それには牧洋の「静かな嵐」が前提になっている。牧洋は「静かな嵐」の中で、「嵐の時代」をむかえた小説家が苦悩のあげく、戦時体制に協力していく心理的な過程を描いているが、そこには新体制が「嵐」として喻えられている。しかし、田中英光は「壁空見えぬ」で、李石薫の「嵐」は終わり、ついに「碧空」の太陽を見ることができたとはいふ。しかし、牧洋は田中英光というような、日本精神の象徴としての「碧空」は最後まで見ていない。牧洋の戦時体制への協力は、あくまでも時代の「嵐」に靡かれるかたちのものであり、日本精神ではればれた「碧空」の太陽を見たからではないのである。このことから、「碧空見えぬ」での牧洋像は、牧洋という鏡に映る田中英光自身の自画像に過ぎないといえる。それをより明確に現しているのが、戦後作「酔いどれ船」で、そこでは、以前の牧洋という自画像は完全に破綻し、田中英光の「碧空」も否定されている。

最後に張赫宙においては、朝鮮文学に内在する近代と反近代の構造を土台にして、張赫宙文学が目指した近代への方向とその挫折の過程を浮き彫りにした。朝鮮の近代文学は、その出発の当初から反近代と前近代への郷愁を強く現しているが、張赫宙文学は、それには全く見向きもせず、ひたすらに近代への方向を目指したのである。しかし、彼が目指した近代への方向は、朝鮮近代史の歴史的な限界として、当然日本的なものにならざるを得なく、それが国策という張赫宙文学の大きな挫折につながる。そのような過程をよく現しているのが、彼の自伝的な代表作「仁王洞時代」とその続編にあたる「孤独なる魂」や「人間の絆」三部作である。「仁王洞時代」では庶子出身である作者の分身が、前近代の象徴である仁王洞の旧弊に苦しんだすえ、文明化された都会に逃げ出すことになるが、そこでは、前近代への嫌悪と近代に向かう不安な好奇心がよく浮き彫りにされている。それがまた、続編の「孤独なる魂」以降になると、学校教育や日本語への興味、さらに自由恋愛などの、都会の町で経験するさまざまな近代的な装置とそれへ傾斜として現れる。そして、このような近代への傾斜こそ、後の挫折につながる張赫宙文学の大きな特徴になっている。

以上、本論で扱った昭和文学の朝鮮体験について簡略にまとめてみたが、このようなさまざまな朝鮮体験は、単に植民地に関わる特集な言説で終わるようなものではなく、昭和文学やその時代思想の中心部分とも密接に通底していると言える。日本文壇から遠く離れ、また今日の文学史的な評価からも縁の遠いこれらの作家たちの言説は、植民地朝鮮に関わる昭和文学の新たな一側面を提示してくれると思われる。しかし、なによりも、日本文学の中心から大きく離れたそれぞれとの距離の分だけ、このような朝鮮体験が昭和文学の全体像を遠望しているようにも思われる。本論がそのような遠望に一助できれば本望である。

第2節 展望と課題

以上、昭和文学による朝鮮体験を日本と朝鮮内部という二つの視点を設定して、それぞれを違う角度で捉えてきたが、このような問題設定の根底にはいつも大きな観念がわだかまり、その観念による解釈の誘惑にかられる。いわゆる国策文学や親日文学の問題である。従来の論はこのような政治的な観念が大きく影響し、少ない例外を除けば、朝鮮体験自体が日本近代文学の蟻地獄になりかねないところがあった。というのは、親日や国策の度合いがいつも大きな評価の基準になり、それが作家論や作品論を最初から決定づけるかたちで行われ、ほとんどの場合はそれぞれの朝鮮体験自体が大きな負い目になってしまいうからである。このような政治的な観念は植民地時代の文学だけに限る問題ではなく、日本で行われる朝鮮

学全般に渡っていて、やたらに気を使うくどいくらいの断り書きを要し、その結論もいかにも平穩無事で当たり前の倫理的な自己証明のようなかたちを取ってきた感がある。その結果、朝鮮体験や朝鮮に関わる言説は大きく萎縮し、その内容においては当たらず触らずのはなはだいびつなものになってきたことも否めない。たとえば、文学研究においては、文学志望生の習作ノートが中堅作家の時代認識を批判する材料として、あるいはプロレタリア文学全盛時代の中学生の習作が、戦時体制を生きる中堅作家の時代認識を問いただず材料として平気で比較検討されたり、または朝鮮への深い興味で書かれた作品がその政治性の微妙なところにおいての不徹底さから自己批判をよぎなくされるケースも少なからずあったのである。そのため、全般的にこの政治論争が大きく主導するかたちで、個別の文学や体験はほとんどそれに則るかたちで議論されるだけで、そのような過程における作家意識や背景などについての考察はあまり試みられなかったといえる。もちろん、このような政治的観念の根底には日韓近代史の痛ましい出来事が大きく影響していることはいうまでもない。その日韓近代史がお互いにそれぞれの違う意味での大きな負い目になって思想の展開を呪縛しているからである。

本論は植民地の歴史と文学にまつわるこのような呪縛をほどく一つの試みとしてなされたものである。その方法として出来るだけ政治観念を止揚し、当時の制度や政策や文化などの横の軸の具体的な分析から、その体験内容を明らかにすることに重点を置いてきた。それぞれの評価が大きく別れる六人の作家に注目したのはこの理由からである。植民地認識が高く評価されている中島敦、とくに日本と日本の在日文学者たちによって賞賛されている金史良、さらに親日・国策文学者として抹殺あるいは隠蔽されている張赫宙、李石蕪、湯浅克衛、田中英光などの文学は、戦後の歴史的な後智恵による政治観念ではさばききれない複雑、かつ矛盾する諸問題を提示してくれると思われる。彼らにおいて輝かしい抵抗と醜い親日・国策の間ばかりを詮索するのはほとんど無意味なことのように思われる。そこには抵抗か迎合かという政治認識の溝の問題より、作品と作家の成熟の問題がより大きく関わっているからである。これからはその成熟の問題が本格的に問われなければならない。

一方、本論では昭和文学の朝鮮体験について、おもに六人の作家に焦点を合わせて論じてきたが、このような範囲設定では十分に扱えないいくつかの問題がある。まず、朝鮮体験の全体像に関するものである。それは文学に限る問題ではなく、民俗、宗教、音楽、文化など、まさにさまざまな分野に渡っているが、本論では文学に限定したため、その全体像を窺うには物足りないところが最初からあるのは当然である。また、文学においても本稿では六人に限定したが、この幅をさらに広げる必要がある。そのなかには、本稿で取り上げていない数多くの日本語

作家の作品だけではなく、日本文壇ではほとんど知られていない現地で活躍した日本人小説家の作品なども含めて考察する必要がある。これは扱う時代についても同様にいえる。昭和を起点にすれば、その前後の問題が当然問われるからである。また、本論で扱っている作家たちに関する問題としていえば、まず、中島敦の場合は、朝鮮だけではなく、満州と南洋時代の文学と比較して検討する必要があると思われる。幸いにそれについては、すでに川村湊氏の「南洋・樺太の日本文学」（筑摩書房、一九九四年）という力作がある。金史良・張赫宙の場合は、それぞれの今日の評価の分岐点についての検討も要求される。同じく朝鮮を描きながら、一方は輝かしい抵抗の文学者としての評価が定着し、もう一方は民族の反逆者として記憶されることになった過程は、親日・国策文学の性質を窺うためのよい材料になるからである。なかでも、張赫宙文学は全面的な見直しが必要と考えられる。本論では近代の問題を氏の自伝的な作品から注目したが、その問題は後の開拓文学や、いわゆる国策文学まで含めての幅広い議論が要求されると思われる。さらに、この近代への問題は朝鮮近代文学の全体にわたる視野での再検討も必要であろう。またそれは李石薫にも同様に当てはまると思われる。

最後に最も大きな問題として挙げられるのは、従来親日・国策文学に関するものである。本論でもその問題を重視して論じてきたが、まだ十分な域に達しているとはいえない。この問題は植民地の諸領域においての丹念な時代研究と併せて、作品論と作家論のなかで論じていく必要がある。その一部分だけの言説を取り上げて、あるいは文学自体と大きく離れた側面からの論議に集中して、個別作家論と作品論を疎かにしてきた傾向があるからである。そして、なによりもこのような政治的な観念による価値判断の是非がこれから本格的に議論されるべきであろう。